

寺子屋とその師匠

史学班 (徳島史学会)

稲飯 幸生*

1. はじめに

美郷村の寺子屋師匠は6名が数えられる。そのうち『日本教育史資料』(文部省・明治25年[1892])の「徳島県の私塾・寺子屋一覧表」に記載されているのは2名で、松田治三郎・井上小十良である。

『美郷村史』には井上小十良の名があるほか、^{まき}積野岡三郎・金山喜平の2名が記載されている。

『種野小学校百年史』には藤見秀景が記載されている。

なお、以上のいずれの資料にもない師匠に南信次郎があり、これは土地の古老より聞き取りしたものである。

また、川田山地域は現在山川町であるが、旧三山村であり地域相互の関係があるので、そこの寺子屋師匠についても記載した。

これらの師匠はそれぞれの地域において子弟の教育に従事したのであるが、ほとんどの師匠が明治5年[1872]の学制頒布以後も寺子屋を開いている。これは小学校創設が国の施策のとおりに進まなかったからであるが、その時期の状況についても併せて加筆した。

2. 中村山地域

・積野岡三郎

生年 不詳

没年 明治17年6月27日

住所 中村山村西山積山11番

積野家は代々中村山村の庄屋を務めており、岡三

郎も天保以後庄屋を務めていた。明治維新前後は大庄屋助役、里長、組頭補などを歴任した。役職を退いた後、明治5年より寺子屋を開いた。門弟の数は多かったが、経済的に苦しい家庭の子供がほとんどであったという。

積山の墓地には門弟一同になる岡三郎の墓がある。戒名は「俊徳院寒霧見光居士」である。

岡三郎が寺子屋を開いたのは明治5年で学制の頒布された年であるが、この地域には小学校が開校されなかった。中村山小学校が開校するのは明治14年3月で、その間約10年間は岡三郎の寺子屋が小学校の代わりをしていたようである。

ちなみに、『徳島県統計書』(明治14年度)によると、明治14年度の中村山小学校の状況は

在籍生徒数	男	64名	女	5名
教員	訓導	0名		
	授業生又ハ助手		1名	

となっている。

現在では中村山地域は過疎化が著しく、中村小学校(元中村山小学校)も休校し住む人が少なくなっている。積野岡三郎が住んでいた積山地域は人が住んでおらず、岡三郎に関しても知る人はないが、後裔の方は大阪市に住んで居られるという。

3. ^{べつしやま}別枝山地域

・松田治三郎

生年 弘化4年[1847]8月15日

没年 不詳

住所 中枝村大字別枝山村374屋敷

* 神山町下分

松田有達の弟で分家して大字別枝山村377番屋敷ノ1に住む
のちに木屋平村大字川井91番屋敷に
転籍

『日本教育史資料』には

学科	読書・習字
旧管轄	徳島領
所在地	別枝山村
開業	記載なし
廃業	明治5年
男女教師	1
男女生徒	男 30 女 7
調査年代	明治5年
身分	平民
習字師匠名	松田治三郎

と記載されている。

この師匠については『美郷村史』には記載がなく、古老に聞いても知る人はない。

美郷村において松田姓を名乗るのは神職であるということで、現住の神職の方2人に聞き取りをしたが、この人達も「松田治三郎」については、知らない。木屋平村へ転籍したので美郷村の人になじみがなかったのであろう。木屋平村で寺子屋師匠をしたという記録もない。

・井上小十良

生年	天保10年 [1839]
没年	明治20年 [1887] 4月22日
住所	別枝山村宗田

『美郷村史』には次のように記載されている。

「井上家は宗田肥前守頼秀九代の嫡流、天保10年、役次郎四男にうまれる。(兄三人死去、小次良が跡を嗣ぐ)。慶応二年 [1866] より明治十二年 [1879] まで自宅で私塾を開き、村内外の多くの子弟を教育した。さらに明治十二年公立別枝山小学校開校されるや教員として迎えられた」。

『日本教育史資料』によると、

学科	読書・習字
管轄	徳島領
所在地	別枝山村
開業	文久元年
廃業	明治5年

男女教師	1
男女生徒	男 25 女 5
調査年代	明治5年
身分	農
習字師匠	井上小十良

井上家の墓地にあった門弟の建てた筆子塚は今はまとめられている。

・金山 喜平

生年	文化2年 [1805]
没年	明治6年 [1873]
住所	別枝村中古井

『美郷村史』には次のように記載されている。

「金山家は別枝山中古井の旧家。身体虚弱の原因もあったのであろうが、子供の時より学問を好み、今の川島町学村の後藤田氏に師事、業成って村へ帰り文政の終わり頃 [1829ごろ]、中古井の自宅で寺子屋を開いた。明治6年9月17日死去する迄、40年間に亘り子弟の教育に当たり、多数の門弟を送り出している」。

自宅の古井から川島へ行くには自宅のすぐ上の来見坂峠を越えて東山へ出て、その後さらに奥丸峠(川島峠)を超えて川島へ出るのが経路である。遠距離のため通学は無理であるので内弟子として住み込んだのであろう。

喜平が師事した川島町の後藤田氏とは後藤田南溪とおもわれる。南溪について『麻植郡郷土誌』には次のように記載されている。

「南溪は字桑村後藤田氏の別家せる人にして、少壮より画を好み、京師に出て山本梅逸に学び、画道大いに進み、その名四方に馳す。後、樵木町に住す。屢々奇行ありて人の意表に出ず。性淡泊にして文人墨客の間に大いに重せらる。文久の終りに居る所兵火に罹り、炎焰天を焦がす。遭難者、家財を負ひ右往左往、東奔西走雑踏を窮む。南溪陳竿の一軸のみを携え、災を避けて三条河原を逍遙して平然たりしと云う。其日常居斯くのごとし」。

京都の居宅焼失後、川島に帰り、慶応2年(1866)10月5日、60才で没した。

また、学島村の大島梅隠は南溪とともに京都に出て同じく山本梅逸に画を学び、故郷へ帰り塾を屋

敷内に建てて近所の子供を集めて教えていたと、いわれているので喜平の師匠は梅隠である可能性もある。

大島梅隠について『麻植郡郷土誌』には次のように記載されている。(抜粋)

「名は辰、通称嘉兵衛、梅隠と号す。児島村の豪農大島源左衛門の四男なり(中略)。天保中、父、郷民教育を志し、太田藍州を奥野より聘して塾を開く。梅隠仍て藍州の薫陶を受くること数年(中略)。後藤田南溪に従ひ京都に至り、山本梅逸に学び研修すること十年(中略)。後、郷里に帰りて日々風流の境に遊ぶ。梅隠、父及び阿部椋亭等と謀りて塾舎を邸の後地に建て郷民教育を主たらしむ。児島・児島須賀の郷、好学の人多く風流韻事を解するものすくなからざるは実に梅隠に負う所多しとす」。



写真1 南信次郎の墓

寺子屋跡のすぐ上側にあり、弟子達が建立したものである。

・南 信次郎

生年不詳

没年 明治15年 [1882] 7月12日

住所 別枝村照尾

自宅の横で寺子屋を開いた。寺子屋の跡は現在では梅林として残っている。そのすぐ上に墓がある。正面には「勤行俊翁居士」と「智即妙戒大師」と夫婦の戒名があり、右側面には明治15壬午年7月12日、南信次郎、74才、同和太郎父とある。左側面には明

治8年乙亥年正月8日、南和太郎母、俗名エキ70才とある。また、台石の左側面には「寄附、門弟中」とあり、右側面には「世話人、棟本五兵衛、井内本五郎」とある。門弟一同が建てた墓で筆子塚と呼ばれるものである。筆子塚は師匠夫妻を祀るのがふつうである。井内本五郎は後の村長井内熊五郎の父である。

この寺子屋師匠については『美郷村史』その他の資料に記載がない。

この地域には明治12年1月に、中枝小学校が創立されるのであるが、それまでは前述の井上小十良が寺子屋の師匠をし、学校開設と同時に中枝小学校の前身の別枝山小学校に教員として勤めた。このように寺子屋師匠が小学校創立とともにその学校の教員になった例は他の市町村にもみられる。

前述の金山喜平は明治6年に死去するまで寺子屋を開設し、南信次郎は明治15年の死去まで寺子屋師匠をしていた。

4. 種野山地域

・藤見 秀景

生年 文政7年 [1824] 1月26日

没年 大正3年 [1914] 7月17日

住所 三山村大字種野山44屋敷

現在の種野小学校プール付近に自宅があった。慶応二年 [1866] に自宅で寺子屋を開き子弟を教えた。

後に山川町に移住して鍼灸業を営んでいたがその後の消息は不明である。

秀景が寺子屋を廃業した年月は不明であるが、この地域に種野小学校が創設されるまでは、寺子屋は存在したとおもわれる。種野小学校の創設について『種野小学校沿革史』には次のように記載されている。

「創立

尋常科 明治14年 [1881] 11月ニ創立シ、明治27年7月16日補習科を創設セリ。

移転

以前ノ学校ハ皆民家ヲ借り受ケ、非常ニ多クノ移動ヲナセシヲ以テ、如何ナルシラベヲナスモ、其移動ノ年月ヲ知りガタシ。

サレバ以下只其場所ヲ順次列記スルニ止メン。

(学校所在地省略)

右ノ箇所ヲ経テ本校ニ移リシハ明治35年10月15日ノ事ナリキ。当時、マエノ校舍ハ生徒満チテ、一机ニ三人ヲ置キ、座板ハ朽チテ、所々抜ケ落チテ危険ナルアリサマナルニ、屋根ハソゲ飛散シテ大穴ヲ出シ雨雪ノ洩リテ落ツルナド、非常ノ難苦をナメキ (以下略)」。]



写真2 藤見秀景の寺子屋があった場所
現在は種野小学校のプールがある。

5. 川田山地域

・住友 招善

生年 不詳
没年 明治32年 [1899] 5月6日
住所 山川町字大内168

川田山地区で初めて寺子屋を開き、地域の人を教育した。筑後の国柳川町小笠井に生まれる。父は山辺平太夫で若い頃京都に住み、後に阿波に渡り、一度九州へ帰ったが、故あって再び阿波へ来て高越寺に寄食していた。地域の人々は招善が文筆に長じていることを聞き、師匠として大内地区に招いた。

住友家に後継者がなかったので養子となり住友姓を名乗った。

明治維新当時から学制頒布により学校教育が普及するまで、郷党の教育に従事し明治25年 [1892] ごろ私塾を閉じたといわれている。

彼の教育は厳格で誤りは一步もゆるさなかった。子弟は一時30名を超え小学校より多いときもあった。一生を独身で通し明治32年5月6日89才で没した。

川田山小学校の創設期の状況について、『山川町史』は次のように述べている。

「川田山小学校が創立されたのは明治14年 [1881]

で、松田与市所有の水車小屋を借りて開校した。当時の児童は4、50名もあったが、毎日出席するのは10名程度であった。これに反して寺子屋師匠の住友招善の教える児童は3、40名にも達した。山村へき地のためか古い習慣になじみ、学校を嫌ったことがしのばれる」。

6. むすび

学制頒布以後、数年間は寺子屋は継続されて小学校との並立の期間があった。このような現象は県下ほとんどの町村にみられるものである。これは明治維新後のまだ落ち着かない世相のなかで、小学校建設が進捗しないという事情のほかに、保護者も授業料納入など新制度になじまないということがあったからである。

また、子供を学校へ通わせることについて、今まで世話になった寺子屋師匠に対する気遣いもあったようである。

このような状態をふまえ、小学校開校の最初の教育目標は「子供を学校へ来させること」で、いわゆる就学率の向上をめざしたものであった。この目的を達成するために、この後小学校では地域の現状に応じて、各種の施策を講じるようになるのである。

資料提供

森口孝男 (美郷村宮倉)
山根金男 (美郷村宗田)
名本定司 (美郷村川俣)
山口 晋 (川島町川島)
住友正夫 (山川町大内)
南 肇 (美郷村照尾)

文 献

久保忠男 (1917) : 『麻植郡郷土誌』。
住友甚一 (1930) : 『川田町史』。
種野小学校創立百周年記念事業協賛会 (1984) : 『種野小学校百年史』。
中枝小学校創立百十五周年記念事業協賛会 (1995) : 『中枝小学校百十五周年史』。
東山小学校 (1972) : 『百年のあゆみ』。
美郷村史編集委員会 (1969) : 『美郷村史』。
文部省蔵版 (1892) : 『日本教育史資料』。
山川町史刊行会 (1959) : 『山川町史』。